

(1) 提案のコンセプト

① 資産の名称・概要

名称：「北海道東部の窪みで残る大規模竪穴住居跡群」

概要： 竪穴住居は、地面を掘り窪め、上に屋根をかけた半地下式のもので、新石器時代の代表的な住居形式である。世界各地にみられるが、日本列島を含むアムール川中・下流域、ロシア沿海州、中国東北地方、朝鮮半島などの東北アジア極東地域においては、旧石器時代終末頃より 20 世紀初頭までの 1 万数千年に及ぶ長期間、気密性・断熱性に優れた住まいとして選択された居住形態の一つである。

竪穴住居は欧州などにみられる石造の構造物と異なり、木材などの有機物を材料とするため、腐朽・埋没の結果、その上屋の痕跡は残りにくい。しかし、地面の窪地として確認でき、確実に人類が生活を営んでいた空間として位置付けできる。さらに、その立地や分布は、当時の人々の生業、生活や集落構造を反映している。

日本列島における竪穴住居は完全に埋没した状態で発見され、発掘調査されるのが一般的である。しかし、寒冷な気候である北海道では腐植土層の発達が遅く、竪穴住居が埋まりきらずに窪みの状態で地表面から確認できる遺跡が多くみられる。林の中で多数の窪みが連続して確認できる状況は、独特の景観を呈し、さらに窪みの形態的特徴から大まかな時代も知ることができる。

北海道東部のオホーツク海沿岸に所在する常呂遺跡、標津遺跡群は、我が国最大規模の竪穴住居跡群で、合わせると 5,000 軒以上もの竪穴住居跡が地表面から確認でき、その学術的重要性から広大な区域が国の史跡として指定されている。

窪みの形状や分布調査結果から、両遺跡群の集落は、縄文時代早期から続縄文時代を経て、擦文・オホーツク文化期のおよそ 7,000 年もの長期間にわたって営まれていることが明らかになっている。さらに、アイヌ文化期のチャシ跡もあることから、アイヌ文化展開の舞台ともなっており、その成立を探ることができる重要な遺跡群でもある。

両遺跡群は、現在の集落に近接しているにもかかわらず、常呂遺跡は網走国定公園の一部であるサロマ湖やワッカ原生花園などに、標津遺跡群は国指定天然記念物標津湿原や標津川、伊茶仁川、ポー川などの河川に隣接しており、いずれも周辺の実環境が良好な状態で保存されている。

縄文時代からアイヌ文化期の約 8,000 年に及ぶ長い期間、同一地域において居住が繰り返されていたことは、当該地域の人々が自然と調和した生活を継続的に営んできたことを物語り、人類と自然の調和を示す顕著な見本であることから、周辺の環境と共に、世界遺産に登録して後世に引き継ぐべき貴重な文化資産と考えられる。

常呂遺跡、標津遺跡群は、いずれも部分的な整備・公開を実施しているが、現在、さらなる追加指定や周辺区域の景観と調和をはかった広大な区域の保存・整備・公開についての検討も行っており、より充実した文化遺産を目指した取り組みを推進している。

② 写真

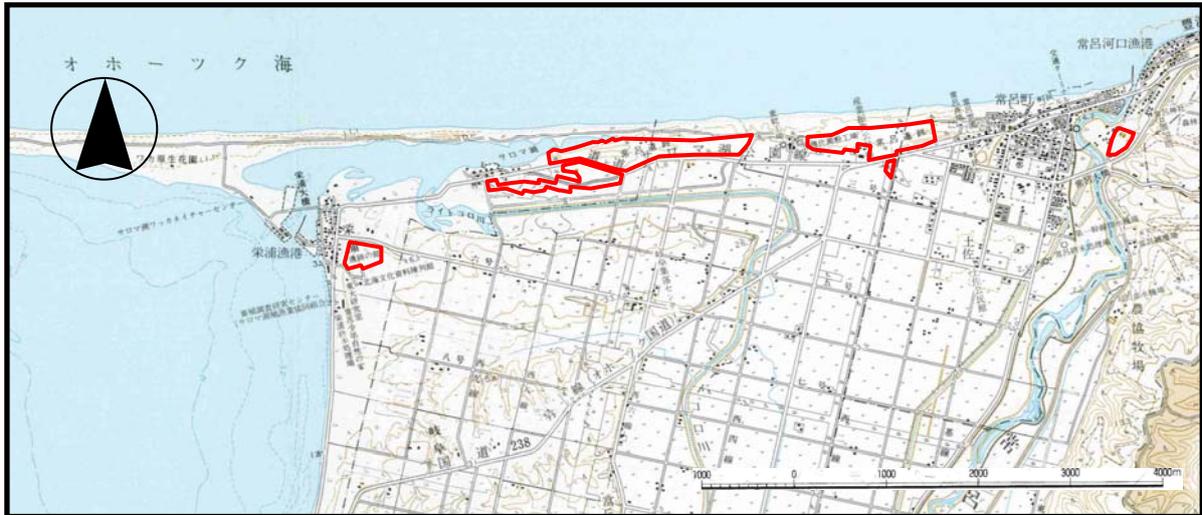
○常呂遺跡(北見市)



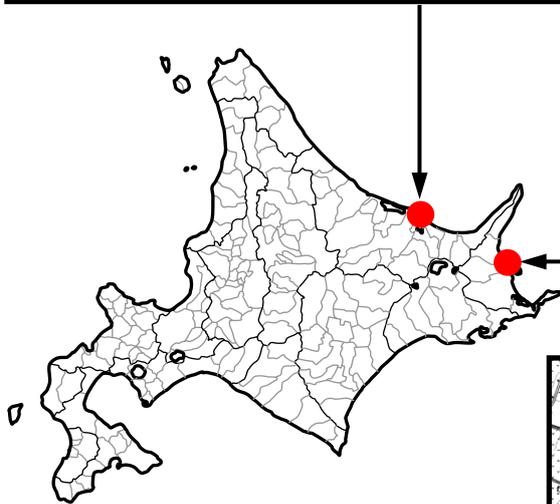
○標津遺跡群(伊茶仁カリカリウス遺跡)



③ 図面



△常呂遺跡



▽標津遺跡群

